

令和5年5月1日		
資料提供		
担当課室	農業環境・鳥獣害 対策室	農作物病虫害防 除所
担当者	岩倉	木村
電 話	073-441-2905	0736-64-2300

病虫害発生予報 第2号(5月予報) について

令和5年度病虫害発生予報 第2号(5月予報)を別添のとおり発表します。

病害虫発生予報 第2号（5月予報）

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

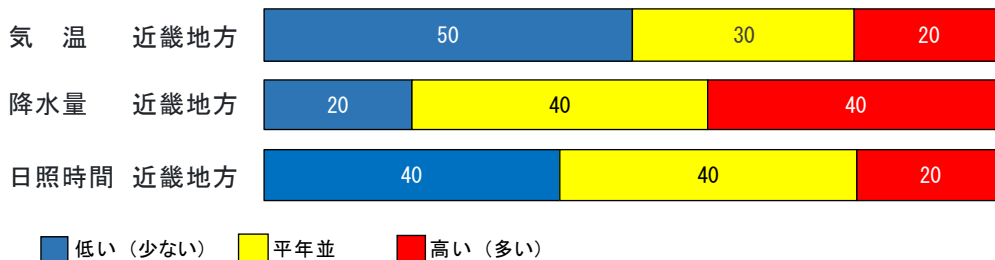
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	もみ枯細菌病による苗腐敗症	並	カンキツ	かいよう病	やや多
	ばか苗病	並		そうか病	やや多
	いもち病	並		黒点病	やや多
	ヒメトビウンカ	並		灰色かび病	やや多
	縞葉枯病	やや少		ミカンハダニ	並
	ツマグロヨコバイ	やや多		ヤノネカイガラムシ	やや少
	イネミズゾウムシ	並		チャノキイロアザミウマ	やや少
タマネギ	灰色かび病	並	カキ	うどんこ病	やや少
	べと病	やや多		円星落葉病	並
				角斑落葉病	並
キュウリ	べと病	並	モモ	せん孔細菌病	並
	うどんこ病	並		カイガラムシ類	やや少
	褐斑病	やや少		キウイフルーツ	並
野菜全般	アブラムシ類	並	果樹全般	カメムシ類	やや少
	ハダニ類	並			
	アザミウマ類	並			

気象予報

近畿地方 1か月予報（04/22～05/21）

2023年04月20日14時30分 大阪管区気象台 発表		
特に注意を要する事項		なし。
向こう1か月 04/22～05/21	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、低い確率50%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目 04/22～04/28	気温	1週目は、低い確率70%です。
2週目 04/29～05/05	気温	2週目は、平年並の確率50%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）



I. 水 稲

1. もみ枯細菌病による苗腐敗症

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるもみ枯細菌病の本田での発生面積率は0%（平年1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病ほ場から採種した種子は使用しない。

② 種子消毒を行う。

2. ばか苗病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるばか苗病の本田での発生面積率は4%（平年2%）であった。

② 種子消毒に用いる薬剤の効果は安定している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① もみ枯細菌病による苗腐敗症に準じる。

3. いもち病（苗いもち、葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

4. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 ヒメトビウンカ 発生時期 早 発生量 並
縞葉枯病 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 4月中旬の休閑田における捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市で3.0頭（平年10.9頭）、紀の川市で6.5頭（平年8.8頭）、かつらぎ町で4.0頭（平年3.5頭）であった。

② 越冬世代の50%成虫化時期は、紀の川市で3月9日以前（平年3月18日）であった。

③ 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市1.7%（平年5.8%）、かつらぎ町1.2%（平年6.9%）であった。

④ 県北部および中部の本田における前年のイネ縞葉枯病の発生面積率は0%（平年6%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 4月中旬の休閑田における20回振りすくい取り調査による平均生息数は、和歌山市81.5頭（平年12.1頭）、紀の川市で10.0頭（平年5.8頭）、かつらぎ町で21.3頭（平年39.7頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

6. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による4月1～20日の誘殺数は、上富田町で1頭（平成3.7頭）、那智勝浦町で0頭（平成0.4頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。
② 5月中旬までに田植えする地域のうち、多発地ではさらに田植え3～4週後に薬剤を処理する。
③ イネミズゾウムシに効果がある育苗箱施薬剤を施用していないほ場で、田植え3～7日後に成虫による食害株率が30%あるいは成虫が1株あたり0.5頭を超える場合は、直ちに薬剤防除を実施する。

II. 野 菜

<タマネギ>

1. 灰色かび病（白斑葉枯病）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は0%（平成1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くする。
② 発病葉や収穫後の残さは、ほ場から速やかに持ち出して適切に処分する。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の二次感染株の発生ほ場率は40%（平成31%）、発病株率は0.3%（平成1.5%）であった。
② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場をこまめに見回り、発病葉を出来るだけ除去する。除去した発病葉は袋に入れ、ほ場の外に持ち出して適切に処分する。また、収穫後の残さに発病葉がある場合は、すき込むと翌年の発生源となるため、集めてほ場の外に持ち出して適切に処分する。
② 二次感染株を確認した場合は、早急に薬剤散布を行う。発生が認められないほ場においても、胞子の飛散による発病拡大を防ぐため予防散布を徹底する。
③ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤によるローテーション散布を行う。
④ 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。
⑤ 令和4年度病害虫防除技術情報第5号（令和5年3月20日発表）を参照する。

<キュウリ>

1. ベと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は30%（平成29%）、発病葉率は2.3%（平成3.0%）であった。
- ② 県中部での4月下旬の発生ほ場率は46%（平成43%）、発病葉率は18.5%（平成12.2%）であった。
- ③ 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
- ② 薬剤防除は予防散布を重点に、薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は10%（平成1%）発病葉率0.1%（平成0.02%）であった。
- ② 県中部での4月下旬の発生ほ場率は54%（平成75%）、発病葉率は10.2%（平成18.7%）であった。
- ③ 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
- ② 薬剤防除は予防散布を重点に、薬液が葉裏に十分かかるように行う。
- ③ 薬剤の感受性低下を防ぐため、同一系統の薬剤は連用しない。

3. 褐斑病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は10%（平成4%）、発病葉率0.2%（平成0.1%）であった。
- ② 県中部での4月下旬の発生ほ場率は0%（過去7年の平均：発生ほ場率45%、発病葉率10.7%）であった。
- ③ 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
- ② 発病葉や収穫後の残さは速やかに処分する。
- ③ 資材に付着した病原菌の胞子が伝染源になるので、支柱等再利用する資材は栽培終了後に消毒する。ネットやマルチ等は更新する。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部のキャベツにおける4月中旬の発生株率は、モモアカアブラムシ0.6%（平成6.5%）、ニセダイコンアブラムシ0%（平成0.3%）であった。
- ② 県中部の施設栽培キュウリにおける4月下旬のワタアブラムシの発生ほ場率は0%（過去9年の平均16%）であった。
- ③ 県中部の施設およびトンネル栽培スイカにおける4月中旬のワタアブラ

ムシの発生ほ場率は62%（過去8年の平均41%）であった。

④ 黄色水盤（紀の川市）への4月1～20日までの飛来数は、25頭（平均100.6頭）であった。

⑤ 5月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 県北部のイチゴにおける4月中旬のナミハダニは発生ほ場率10%（平均48%）、生息葉率1.0%（平均19.0%）、カンザワハダニは発生ほ場率10%（平均16%）、生息葉率7.5%（平均3.0%）であった。

② 県中部の施設およびトンネル栽培スイカにおける4月中旬の発生ほ場率は77%（過去8年の平均68%）、1葉当たりの生息密度は0.8頭（過去8年の平均0.1頭）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① ハダニ類はほ場の周辺から侵入するので、外縁部の株において早期発見に努め、初期防除を行う。

② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

3. アザミウマ類

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 県北部のイチゴにおける4月中旬のヒラズハナアザミウマは発生ほ場率10%（過去7年の平均56%）、1花当たり生息密度0.7頭（過去7年の平均0.7頭）、ミカンキイロアザミウマは発生ほ場率0%（平均：発生ほ場率10%、1花当たりの生息密度0.1頭）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリにおける4月下旬のミナミキイロアザミウマは発生ほ場率20%（過去9年の平均36%）、ミカンキイロアザミウマは発生ほ場率20%（過去9年の平均4%）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 生息密度の低い時期から薬剤防除を行う。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

（1）予報内容 発生時期 やや早い（初発日の平均5月23日）
発生量 やや多

（2）予報の根拠

① 予察ほ場（有田川町奥）における「宮川早生」の展葉期は4月17日（平均4月21日）であった。

② 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における春葉の越冬病斑の発病葉率は15.3%（平均9.5%）であった。

③ 前年10月中旬の県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における春葉発病の発生ほ場率は19%（平均19%）、発病葉率は0.5%（平均0.5%）であった。

④ 5月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

年 0.4%) であった。

② 予察式によると、第 1 世代 1 齢幼虫初発日は 5 月 2 日 (実測値の平年 5 月 13 日) と予想される。

③ 5 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 第 1 世代 1 齢幼虫初発日から約 40 日後の 2 齢幼虫最盛期が防除適期である。

7. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 予察ほ場 (無防除) における黄色粘着トラップによる 4 月 1 ~ 20 日の誘殺数は由良町 1 頭 (平年 9.4 頭)、有田川町 1 頭 (過去 9 年の平均 2.3 頭) であった。

② 5 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防風樹のイヌマキやサンゴジュの近くでは発生が多くなるので、特に丁寧に薬剤防除を行う。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 前年 10 月の「富有」の発生ほ場率は 65% (平年 79%)、発病葉率は 10.0% (平年 19.1%) であった。

② 5 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 子のう胞子飛散最盛期は 4 月下旬 ~ 5 月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発したほ場では、この時期の防除を徹底する。

② 4 ~ 5 月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。

③ 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬液は葉裏をねらって丁寧に散布する。

2. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年 10 月の「富有」における発生ほ場率は 41% (平年 38%)、発病葉率は 6.1% (平年 3.5%) であった。

② 5 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 子のう胞子飛散は、5 月上中旬から始まり、5 月下旬 ~ 7 月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。

② 薬剤防除は 5 月から 8 月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年 10 月の「富有」における発生ほ場率は 82% (平年 65%)、発病葉率は 13.9% (平年 10.4%) であった。

② 5 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 分生子による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次感染を繰り返す。
- ② 薬剤防除は円星落葉病に準ずる。

4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における黄色粘着トラップによる4月1～20日の誘殺数は1頭（平成3.8頭）であった。
- ② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 開花期～落弁期に防除する。
- ② 防風樹のイヌマキやサンゴジュの近くでは発生が多くなるので、特に丁寧に薬剤防除を行う。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の4月中旬の発病葉の発生ほ場率は0%（平成14%）、発病葉率は0%（平成0.4%）、発病枝の発生ほ場率は0%（平成24%）、発病枝率は0%（平成1.2%）であった。
- ② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 春型越冬病斑形成枝は葉への伝染源となるので剪除する。
- ② 果実発病は5月以降の風雨により多くなるので、降雨直前の予防散布を徹底する。予防散布ができなかった場合、降雨後できるだけ早く薬剤散布を行う。
- ③ 本病の防除薬剤のうち、マイコシールドは連用すると葉先の黄化を生じることがあるので注意する。

2. カイガラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の4月中旬のカイガラムシ類（ウメシロカイガラムシ雌成虫・クワシロカイガラムシ雌成虫・ナシマルカイガラムシ幼虫）の寄生枝の発生ほ場率は0%（平成24%）、寄生枝率は0%（平成1.0%）であった。
- ② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹体生育期における防除適期は、第1世代のふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期の少し後に薬剤散布を実施する。
- ② 県北部のクワシロカイガラムシのふ化幼虫発生盛期は5月3日前後と予想している。

<キウイフルーツ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における4月中旬の発病葉の発生ほ場率は0%（過去4年の平均

- 0%)であった。
- ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 新梢の萎れ・黒変や樹液の漏出がみられる枝は、前年枝の基部から切除する。
- ② 作業に使用した器具類(ハサミ、ノコギリ等)は70%エタノールで消毒する。
- ③ 風当たりの強いほ場では、防風対策を行う。

<果樹全般>

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 県内47地点のチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は落葉50リットル当たり0.0頭(前年0.3頭、平年0.5頭)、捕獲地点率は2.1%(前年21.7%、平年21.1%)であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 果樹カメムシ類の飛来量はほ場間差が大きいので、ほ場内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② ウメ・モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。
- ③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。
- ④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害が認められた場合は薬剤による防除を行う。
- ⑤ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所(紀の川市、農業試験場内)

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在(有田川町、果樹試験場内)

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在(紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内)

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在(みなべ町、果樹試験場うめ研究所内)

TEL 0739-74-3780